

平成23年11月 2日
防衛省南関東防衛局

第17回防衛問題セミナー

大震災に備えて ～災害対処の取組みについて～

次 第

- 1 開会の挨拶
南関東防衛局長 山本達夫
- 2 来賓挨拶
神奈川県古尾谷光男副知事
- 3 第I部：講演
演題：「東日本大震災における自衛隊の活動・任務」
講演者：陸上自衛隊 東北方面総監部 須藤彰 政策補佐官
- 4 質疑応答

休 憩
- 5 第II部：パネルディスカッション
テーマ：「大震災の発生に対する地域防災の在り方について」
コーディネーター：古屋 剛（南関東防衛局企画部長）
パネリスト：神山光義（神奈川県安全防災局危機管理部災害対策課長）
伊藤賢司（横浜市消防局危機管理室危機管理部緊急対策課長）
小伊藤優子（拓殖大学大学院生）
須藤彰（東北方面総監部政策補佐官）
山崎誠一（東部方面総監部防衛部防衛課長）
- 6 質疑応答
- 7 閉 会

自衛隊と世界各国の東日本大震災災害派遣活動記録

ありがとうを
力にかえて



海災部隊 最大規模 約1万5000人

海上自衛隊が行った活動のメインが救護物資の輸送。米軍と協力しつつ、大型艦艇での大量輸送と、機動力を生かして航空機での離島などへの輸送を行い、被災地への物資を次々に送り込みました



艦艇と航空機を駆使し、米軍とも一致団結。物資の輸送を集中的に行い、被災者の生活を助ける!

福島県いわき市の小名浜サンビーチに上陸し、救護物資を輸送するエアクッション艇 (LCAC)



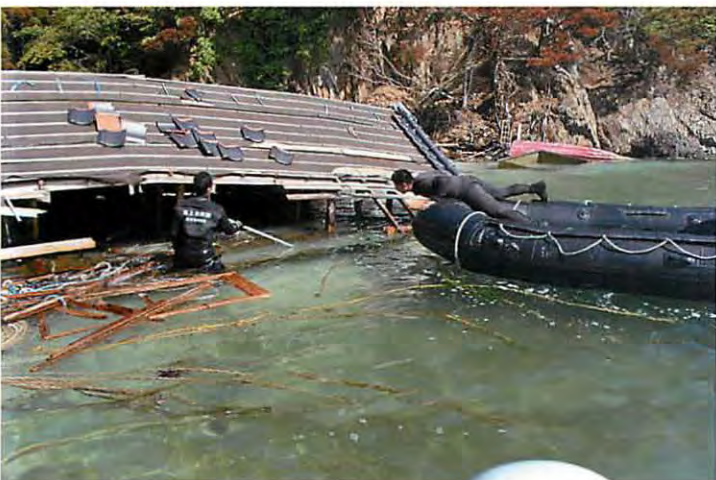
青森県八戸港で地球探査船「ちきゅう」を見学中だった小学生を救助



各地から集まった救護物資を被災地に輸送艦「くにさき」で運び、搬出する



輸送艦「くにさき」の隊員は宮城県石巻市渡波地区で入浴支援を実施。血圧測定も行った



宮城県牡鹿半島で行方不明者の捜索活動を行う隊員たち

活動に当たった隊員の声



横須賀地方隊 第41掃海隊
高橋 潤 1等海尉

1人でも多くご家族の元に
帰りたいという思いで海中を捜索

私は普段は機雷や海中で見つかった不発弾の処理などを行うのが主な任務の、水中処分員です。災害派遣では海上で行方不明者の捜索に従事しました。震災直後に横須賀港から出港し、現場到着後すぐに最初のご遺体を発見。海水が非常に冷たかったのを鮮明に覚えています。捜索に当たっている隊員から出る言葉は、「長い間つらかったなあ」「ごめんな、見つかるのに時間がかかって」などご遺体に優しく語りかけるかのようなものが多かったのも印象的でした。われわれ水中処分員は、「行方不明者がそこにはいないとしても、捜索をやめれば発見できる可能性がゼロになる。1人でも多くご家族の元に帰りたい」という思いで懸命に捜索を続けました。

陸災部隊

最大規模 約7万人

圧倒的なマンパワーと大型重機など多様な装備を持つ陸上自衛隊。全国から隊員が集結し、倒壊家屋などでの捜索・救助やがれきの除去、さらに入浴や食事など被災者の支援に当たりました



全国各地の駐屯地から隊員が集結し
捜索や生活支援など多方面から全力で奮闘!

入浴に来ていた子どもに語りかけ、コミュニケーションをとる隊員



福島県南相馬市で輸送した救援物資を運ぶ



被災した高齢者を救護して運ぶ隊員たち



手こぎボートでがれきが漂う水上の捜索を行う



給水支援活動では子どもたちの笑顔が見られた



即応予備自衛官や予備自衛官も派遣され、各地で活躍

活動に当たった隊員の声



第4師団 第4戦車大隊
山本勝幸 陸士長

捜索活動でご遺体に直面。
先輩からもらった言葉を胸に刻む

捜索活動で初めてご遺体に接したときのことが強く印象に残っています。家族や親戚ではない他人の死に初めて直面し、ショックで顔を直視できず、何もできなく、情けない気持ちになりました。そのとき、近くにいた先輩たちが率先してご遺体に「よく頑張ったね」、「家族の所に帰れるよ」と声をかけ、泥まみれになった顔を水とタオルを使い丁寧に拭いている姿を目にしました。この体験を経て、精神的に強くならなければならないと気付くことができ、次は自分が実践しようと決心。その後に対面したご遺体は、先輩と同じように、顔を拭いて、しっかり顔を見届けることができました。「次はおまえが後輩に教えてやるんだぞ」という先輩の言葉を、胸に刻みたいと思います。

空災部隊 最大規模 約2万1600人

短時間で移動ができる航空機の特性を生かし、救援物資のほか緊急医療チームなどを被災地へ輸送。ヘリコプターでの救助に加え、火災時には空中消火を実施。さらに被災地の情報収集にも尽力しました



機動力を最大限に活用し、被災地に駆け付ける！ 物資輸送や空中消火など空からの支援で活躍

第1輸送航空隊が空中給油・輸送機でさまざまな支援物資を大量に輸送



被災者の避難場所への移動をCH-47輸送ヘリコプターでサポートする



建物の倒壊が激しい地域で地元の方々とともにがれきの除去を行う隊員たち



けが人などを航空機で搬送し、基地へと運び込む

活動に当たった隊員の声



航空救難団 三沢ヘリコプター空輸隊
西本公博 2等空曹

人を救うことの重さを痛感し、
体力と精神力の鍛錬を誓う

地震の翌朝、われわれの部隊に与えられたのは空中消火任務。青森県の三沢基地を離陸し、岩手県大槌町の火災現場に向かいました。消火活動中、がれきと海水に囲まれた建物の屋上に避難している人を発見。指揮所からの命令により即座に人命救助を優先することに。現場は着陸ができない場所のため、吊り上げによる救助を実施。通常、われわれの部隊は輸送任務が主体であるため、クルー全員が初めての経験でしたが、冷静に対応できました。航空機の燃料が続かず、救出任務を後続に引き継ぐ際、まだ多くの避難者が残っているのを見て、後ろ髪を引かれる思いで現場を後にしました。人を救うことの重さを痛感し、体力と精神力を一層鍛えなければならないと感じています。



燃料不足が深刻な被災地に迅速な輸送で貢献



岩手県の山田南小学校で隊員たちが子どもたちに給水活動を行う

原子力災害派遣部隊 最大規模 約500人

福島原子力発電所では陸上自衛隊の化学科部隊や航空科部隊などのスペシャリストが対応。一丸となってヘリや消防車による原子炉への放水などを実施。近隣での捜索や住民の避難支援も行いました



特殊技能を持つ陸・海・空の精鋭が集まり、原子力災害に一丸となって立ち向かう!

福島県双葉郡浪江町で、放射性物質を含む埃などの付着を防ぐタイベックスーツを着用し、捜索活動に当たる



避難地域内の沿岸部で水中を見ながら捜索活動を行う隊員たち



福島原発近くの水を積んだバージ船を横付けする作業を実施



防護マスクを装着し、静かに任務を待つ化学科隊員



原発への水投下作業に出発するCH-47ヘリ



原子炉に対して放水活動を行う消防車A-MB-3

活動に当たった隊員の声



中央即応集団 第1ヘリコプター団
京野克宏 1等陸尉

第1原発への放水冷却を実施。
静寂の中で放射線と向き合う

福島第1原子力発電所4号機への放水冷却隊の要員になり、放水任務を担いました。地震などによる亀裂や陥没などが残る悪路を抜けて原発に向かう中、車内は静寂に。密閉された空間の中で、五感が研ぎ澄まされていくような感覚でした。放射線という目に見えないものに対処する不安は多少ありましたが、私の故郷でもあるこの地を何とかしたいという思いもあり、最善を尽くそうと覚悟を決められたため、意外にも穏やかな心境でした。建屋を目の当たりにし、その崩壊の様子に愕然。すぐに気を取り直し、「届け! 届け!」と心の中で叫び、放水に集中。放水終了後、安心感とともに、効果を確認する術がないもどかしい気持ちが入り混じったことをよく覚えています。



宮城県のJR仙石線の復旧支援を行う「ソウルトレイン作戦」で駅の看板を戻す米軍



地元の方々と協力してがれきを1つつづつ撤去している米軍の隊員たち



燃料の輸送をはじめ、米軍による支援の活動内容は多岐にわたった



石巻市の公共施設にてシャワー支援を実施。積極的にコミュニケーションをとっていた



北澤俊美防衛大臣が米空母「ロナルド・レーガン」を訪問し、感謝を伝えた

米軍以外の各国軍からの支援



オーストラリア

オーストラリア軍は保有する4機のC-17輸送機のうち1機を派遣し、3月14日に自国の救助隊員75人と救助犬2匹を日本に輸送した後、3月25日に帰国するまでの11日間、水などの救済物資、沖縄県那覇市の陸上自衛隊第15旅団の輸送を行った。また、3月22日にはさらに2機のC-17を用いて原発対応のための高圧放水ポンプを自国から横田飛行場へ緊急輸送した。



韓国

韓国軍はC-130輸送機により、3月14日に救助隊員102人を日本に輸送したほか、日韓間で物資の輸送を行った。



タイ

タイ軍はC-130輸送機で、3月19日に救済物資を輸送した。



イスラエル

イスラエル軍は、3月27日に医療チームを派遣し、3月29日から4月10日まで宮城県南三陸町で診療活動を行った。



フランス

フランス国防省は、3月22日、原子力災害派遣活動中の自衛隊を支援するため、防衛省に対し放射能防護服1000着を無償で提供することを決定し、陸上自衛隊が受け入れた。

活動に当たった隊員の声



在日米軍司令部第3部
ジョセフ・エスピリツ 海軍少佐

自衛隊は非常に信頼できる組織。
日米間の絆が強まったと考えます

私は米軍が行う「トモダチ作戦」において、司令部で日米の緊急事態対処チームに勤務しました。アメリカ政府と日本政府の間で調整を行うなどの仕事を行いました。6人の自衛官とともに仕事に当たりましたが、その1人に震災の日にも子どもが生まれました。ただ、彼は震災の日から3週間、1日も家に戻らずに司令部で勤務。その姿に、自衛官の仕事に対するひたむきな思いと、被災者を助けたいという強い気持ちを見た気がします。この「トモダチ作戦」は震災への対応という不幸な状況ではありますが、日米間の絆はさらに強まったと考えます。自衛隊はわれわれにとって、非常に信頼できる組織です。常にわれわれ米軍がそばにいることを忘れないでください。

米軍

最大規模 約1万6000人

東日本大震災という未曾有の災害に対し、世界各国が日本の支援に協力。中でも米軍は「トモダチ作戦」の名の下、捜索・救助活動や輸送、がれき除去、生活支援などさまざまな活動を実施しました



米軍による支援活動「トモダチ作戦」のほか世界各国による救援が被災地に届く!

宮城県石巻市の大街道小学校でがれき除去作業。任務完了後に地元の方々と記念撮影



米軍の隊員とハイタッチを行っている子ども。こうした交流が各地で見られた



米軍と陸上自衛隊が協力して救援物資などの輸送支援を行う



石巻市の青葉中学校で行われた米軍による慰問演奏。多くの聴衆が集まった



米軍と陸上自衛隊、生徒らによる石巻工業高校の室内ヘド口除去作業

活動に当たった隊員の声



在日米軍司令部第4部
ジョージ・マツザック 空軍少佐

困難に冷静に立ち向かう姿に感動。
全世界の人が日本を手本にすべき

米軍による支援活動の「トモダチ作戦」では、東京都の横田飛行場の中にある日米調整所で被災地に向けた輸送物資を調整する業務に携わりました。われわれから自衛隊に支援物資を渡し、それを自衛隊が被災地に運搬するのが業務の流れです。一緒に仕事をしていて、自衛隊は素晴らしい組織だと実感しました。無駄のない動きで、真摯に任務に向かい合う。海外でほかの軍隊とも仕事をしましたが、ここまで統制がとれ、高い士気を持っていたところは無かったように思います。また、救助される被災者の方々も、整然と、冷静に事態に対応する姿に感動しました。全世界の人が、これから東日本大震災のような困難に直面したとき、日本をお手本にすべきだと考えます。

自衛隊の東日本大震災での活動実績 (2011年7月31日現在)

Rescue 人命救助など

人命救助
1万9286人(全体の約7割)
ご遺体收容
9505体(全体の約6割)
ご遺体搬送 1004体

Transport 物資などの輸送

物資などの輸送
1万3906トン
医療チームなどの輸送
2万240人
患者輸送 175人

Support 生活支援

給水支援
3万2284トン(最大約200カ所)
給食支援
500万5484食(最大約100カ所)
燃料支援 1396キロリットル
入浴支援
108万4132人(最大35カ所)
医療支援 2万3370人
道路啓開 322キロメートル

最大派遣勢力

人員約10万7000人

航空機約540機

艦艇59隻



防衛省で開かれた災害対策本部会議の様子

東日本大震災から3日後の3月14日に編成された
陸・海・空各自衛隊による統合任務部隊は、
7月1日に編成解除されました。
引き続き各自衛隊は、東北地方の被災地の方々のために、
生活支援をはじめとした活動に取り組んでいきます。



災害対策本部会議で編成解除の命令書を渡す
北澤俊美防衛大臣

